

# 游美

Yubi  
No. 51



冷軍 (Leng Jun)

『蒙娜麗莎  
— 關於微笑的設計  
(モナリサ— 微笑のデザイン)』

油彩 / 125.0 × 45.0cm

中国の全国的公募展「全国美術展」は、中国で5年に1度開かれ昨年第10回展を迎えました。本展覧会は、その受賞優秀作品の中から、さらに厳選した選抜展です。経済と共に目覚ましい発展と変容を遂げる中国現代美術、伝統に裏打ちされた高い技術により描かれた中国画、油彩画、水彩画、版画、そして中国特有の年画、漆画など現代の中国美術の現況を概観できる展覧会といえます。

この作品の作者冷軍は、現代的な感覚と表現力を兼ね備え、成長を期待されている若手人気作家のひとりであり、現代中国美術界の代表作家といえます。レオナルド＝ダ＝ヴィンチの名画『モナリサ』のポーズをとる現代女性を、写真と見紛うばかりに緻密に描写しています。その確かなデッサン力による極端な超写実主義が、見る者に与えるえもいわれぬ衝撃こそ冷軍芸術の真骨頂です。

(首席学芸主事 堀江俊夫)

## 現代中国の美術展

2005年12月10日[土]～2006年2月5日[日]

### Contents

- 1 現代中国の美術展
- 2・3 特集 / 師 関南沖先生を語る
- 4 探訪 / 飯田美郎先生を訪ねて
- 5 美に遊ぶ
- 6 所蔵作品から
- 7 企画展紹介
- 8 企画展紹介  
わが街のモニュメント  
あとがき

# 游美

Yub i  
No. 52



## 松岡映丘 『屋島の義経』

昭和4(1929)年／絹本・彩色・額装  
188.0×99.5cm  
東京国立近代美術館蔵

『平家物語』には、武将達の合戦での様子や情景描写が豊富に綴られています。日本画家はその記述を読み解きながら作品としていきました。この作品は、屋島(現在の高松市)の戦いで初戦を制した義経

が、「一院(後白河法皇)の御使、檢非違使五位尉源義経」と大音声を挙げて名乗っている場面を描いており、『平家物語』に記されている赤地の錦の直垂に、紫裾濃(上を淡く下を濃くした染色)の鎧を着けています。華々しい義経の姿を描く、古くから「牟礼高松図」として知られる画題ですが、松を背景に騎馬するそれまでの作品と違い、映丘は立って扇を持つ姿とすることで新鮮味を出しています。大和絵のもつ鮮やかな色彩と装飾性を活かした華麗な画面の中で、義経の武者ぶりが良く表われています。

(副主任学芸員 中田智則)

## 歴史浪漫—源平の時代展

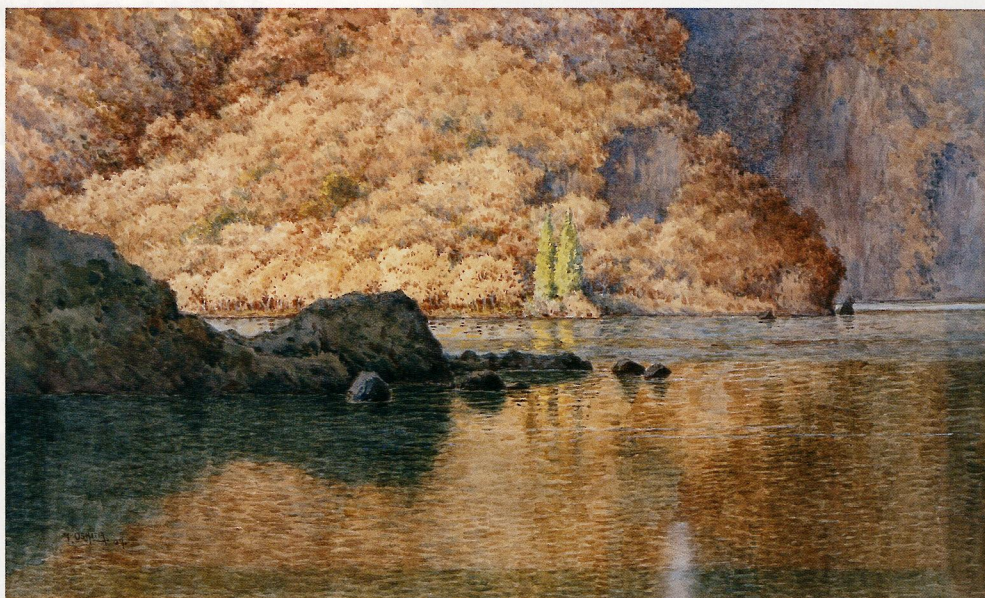
2006年2月11日[土]～3月21日[火・祝]

### Contents

- 1 歴史浪漫—源平の時代展
- 2・3 美術鑑賞旅行
- 4 探訪／玉川信一先生を訪ねて
- 5 所蔵作品から
- 6 美に遊ぶ
- 7 企画展紹介
- 8 企画展紹介  
写真講座の作品から  
あとがき

# 游美

Yubi  
No. 53



幕末から明治にかけて日本に移入された水彩画は、明治30年代になると大変な隆盛を見せ、多くの名作が生み出され、水彩画を専門とする画家も現れました。大下藤次郎もその一人です。彼は単に画家として活躍するだけでなく、『水彩画之葉』(明治34年)などの著作や美術雑誌『みづゑ』の創刊(明治38年)、そして水彩画講習所(後の日本水彩画会研究所)を設立して後進を指導し、また日本各地で水彩画の講習会を開くなど、水彩画の普及と発展のためにおこなった多大な貢献でも知られています。

この作品は、青梅近辺を流れる多摩川を描いたものです。一時青梅に移り住んでいたこともあった大下は、その自然を愛し、様々な作品に描きました。ここでは、見事に色づいた秋の渓谷をゆったり流れる川と、水面に映し出されるその鮮やかな色合いを、細かい筆触で丁寧に描き出しています。そのみずみずしい透明感は、水彩画でしか表すことのできないものです。

(主任学芸員 山口和子)

## 大下藤次郎 (1870~1911) 『多摩川畔』

明治40(1907)年/水彩・紙  
48.8×69.7cm  
島根県立石見美術館蔵

### Contents

- 1 近代日本の水彩画
- 2 友の会代議員会報告  
企画展紹介
- 3 企画展紹介
- 4 探訪/國司華子先生を訪ねて
- 5 所蔵作品から
- 6 美に遊ぶ
- 7 春の美術鑑賞旅行
- 8 わが街のモニュメント  
あとがき

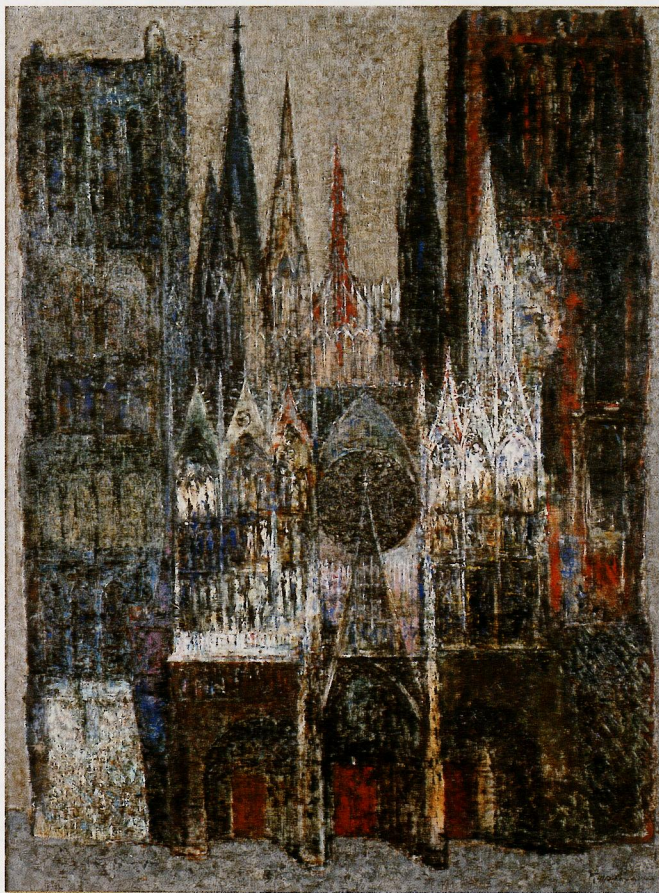
## 近代日本の水彩画

—その歴史と展開—

2006年7月22日[土]~9月3日[日]

# 游美

Yubi  
No. 54



## 『ルーアンの聖堂』

1967～73年 / 油彩・カンヴァス  
130.3×97.0cm / 作家蔵

村山密は、フランスで50年にわたり制作を続けている、茨城県潮来市出身の洋画家です。パリをはじめ、実際に街を歩く中で心に響いた景色を作品に描いてきました。また、パリのノートル・ダムほか、ルーアンやアミアンなど各地の聖堂を描き、画家の大切なテーマとなっています。そのうちの一つ、パリから北西に約100キロ、セーヌ河畔に位置するルーアンの街には、ゴシック建築の代表作である大聖堂があります。村山は、高くそびえる聖堂を正面から捉え、黒の抑えた色調の中で白や赤などの絵具を効果的に用いて聖堂の荘厳さを表現しました。

米寿を迎えた画家の画業を振り返る本展では、未発表の近作をはじめ、油彩画、パステル、色ガラスを重ねたジュマイユなど、約100点の作品をご紹介します。  
(学芸員 吉田衣里)

## 村山密展

2006年12月2日[土]～2007年1月14日[日]  
茨城県近代美術館

### Contents

- 1 村山密展
- 2・3 特集 / 父 後藤清一を語る
- 4 美に遊ぶ
- 5 探訪 / 鶴見修作先生を訪ねて
- 6 所蔵作品から
- 7 企画展紹介
- 8 心に残る私の一点あとかき



## 『春宵』

昭和60(1985)年／紙本・彩色・屏風四曲一隻／156.0×316.0cm／個人蔵

日本の自然と文化をこよなく愛した加山は、桜をテーマに多くの作品を残しました。この『春宵』もそうした作品の一つで、篝火に照らされた満開の夜桜が描かれています。「桜の花の、凄まじさみたいなものを、表してみたかった」と加山は述べていますが、金色に輝く渦巻く炎によって、咲き乱れる桜の花が暗闇の中から浮かび上がる様は、幻想的で妖艶な雰囲気をも漂わせています。加山は現実に咲く桜ではなく、桜の象徴性や普遍性を描いているのでしょう。

水墨表現も追究していた加山は、胡粉で描いた花卉の上に墨を塗ることで、闇の中に消えていく桜の花を表現しています。桜がどこまでも続くかのような空間の広がり、加山の豊かな造形感覚だけに留まらず、あくなき技法研究の賜物でもあるのです。 (副主任学芸員 中田智則)

### Contents

- 1 加山又造展
- 2・3 美術鑑賞旅行
- 4 探訪／桑原弘明先生を訪ねて
- 5 美に遊ぶ  
植物園でのスケッチ会
- 6 所蔵作品から
- 7 企画展紹介
- 8 企画展紹介  
心に残る私の一点  
あとがき

## 加山又造展

2007年2月17日[土]～3月25日[日]  
茨城県近代美術館



## 小野竹喬『沼』

昭和45(1970)年／紙本・彩色・額装／120.0×160.0cm／第2回改組日展／京都市美術館蔵

風もほとんどなく、かすかに水面が揺れる静寂に包まれた沼に、何か落ちたのであろうか。左の方から<sup>みなも</sup>拡がる波紋がこのことを物語っている。その波紋は白や青など、水深や光の差によって異なる色彩に彩られている。作者の小野竹喬は、刻一刻と変わる水面を見つめ続けた画家であった。福島県裏磐梯の五色沼に取材したこの作品でも、静から動へと移りゆく水面の一瞬の姿や、わずかな色彩の変化を見事に捉えている。

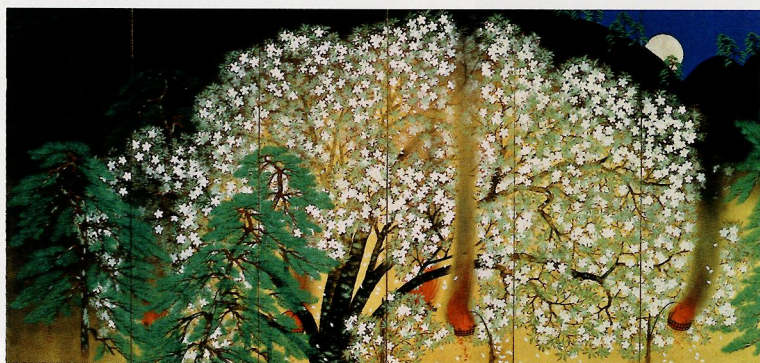
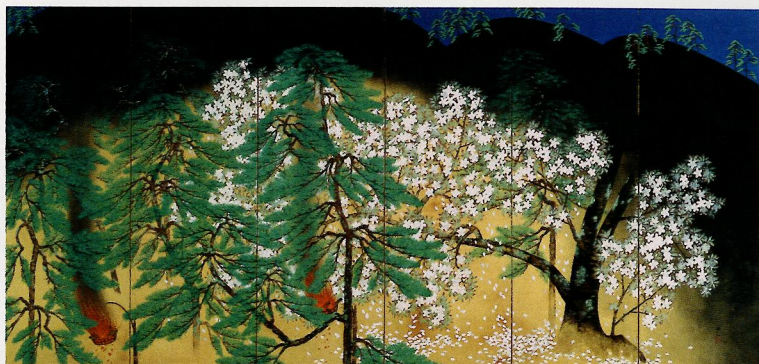
竹喬は俳人であった兄の影響で句作を行い、松尾芭蕉に強く惹かれていたという。波紋が水面の移ろいを感じさせ、芽吹く木によって春の岸辺に竹喬が立っていることをうかがわせる。一つ一つのモチーフによって沼にまつわる物語が展開していくこの作品は、わずかな言葉で豊かな詩情を紡ぎ出す俳句の世界にも通じていよう。(副主任学芸員 中田智則)

## 水のかたち展

2007年7月28日[土]～9月24日[月・振]  
茨城県近代美術館

### Contents

- 1 水のかたち展
- 2・3 ご挨拶
- 4 探訪／白木俊之先生を訪ねて
- 5 美に遊ぶ
- 6 所蔵作品から
- 7 企画展紹介
- 8 春の美術鑑賞旅行  
あとがき



## 横山大観「夜桜」

前期展示 10月27日～11月18日

昭和4(1929)年  
紙本・彩色・六曲一双屏風  
各177.5×376.8cm  
大倉集古館蔵

大倉喜八郎の子息喜七郎は、昭和5年、ローマにおいて、当時の日本画家多数を擁した日本美術展を私費で開催し、その出品作をコレクションに加えました。画家たちは、日本画のすばらしさを示そうと、力作、大作を出品しましたが、この展覧会の代表となったのが、横山大観でした。掲載の作品は、その大観が同展のために力を込めて制作した1点で、月夜に浮かぶ満開の桜を画面一杯に描いた見事な屏風絵です。本県では、幾度となく大観に関わる展覧会を開催してきましたが、いずれもこの作品は出品されておられません。今回、長年の念願がかない、茨城初出品、五浦初見参となりますので、是非この機会にご覧いただきたいと思えます。なお、展示は、前期限定(10月27日～11月18日)ですので、ご注意ください。

(茨城県天心記念五浦美術館首席学芸員 小泉淳一)

開館10周年記念

## 大倉集古館の名宝

2007年10月27日[土]～12月9日[日]  
茨城県天心記念五浦美術館

### Contents

- 1 大倉集古館の名宝
- 2・3 特集／祖父 木村武山を語る
- 4 探訪／藤田志朗先生を訪ねて
- 5 美に遊ぶ
- 6 所蔵作品から
- 7 特別寄稿／森田茂展に寄せて
- 8 企画展紹介  
心に残る私の一点  
あとがき

# 游美

Yub i  
No. 58

開館20周年 美術館設立60年記念 所蔵作品選

175  
3000

— 時を重ねて3000点  
飛躍に向けての175選 —

2008年4月19日[土]～5月25日[日]  
茨城県近代美術館



横山大観「流燈」

明治42(1909)年  
絹本・彩色・軸装  
143.1×51.5cm

昭和63年(1988)10月に開館した茨城県近代美術館は、今年20周年を迎えます。また、当館の前身である茨城県立美術館は、遡ること昭和22年(1947)に大洗町の常陽明治記念館内に創設されており、県立美術館が設立されてからの歩みは、昨年60年を数えました。

設立以来美術館では、日本画の横山大観や小川芋銭、洋画の中村彝など、本県ゆかりの作家たちを核としながらコレクションの充実に努め、現在約3000点を数えるまでに

なりました。本展は、開館20周年、設立60年を記念し、当館の所蔵品から選りすぐりの175点を、4つの展示室すべてを用いて一堂に展示するとともに、美術館のあゆみやコレクションの特徴について改めて紹介するものです。開館以来、これほどの規模で所蔵の名品を展示するのは初めてのこととなります。(主任学芸員 山口和子)



中村彝

「カルピスの包み紙のある静物」

大正12(1923)年/油彩・カンヴァス  
61.0×50.0cm



クロード・モネ「ポール＝ドモワの洞窟」

1886年/油彩・カンヴァス/65.0×83.0cm

## Contents

- 1 開館20周年所蔵作品選
- 2・3 美術鑑賞旅行
- 4 探訪/六崎敏光先生を訪ねて
- 5 美に遊ぶ
- 6 所蔵作品から
- 7 企画展紹介
- 8 企画展紹介  
心に残る私の一点  
あとがき



# 游美

Yubi  
No. 59



かのこぎ たけしろう  
鹿子木 孟郎  
「津の停車場(春子)」

明治31(1898)年  
油彩・カンヴァス/57.1×39.0cm  
三重県立美術館蔵

陸橋の上に佇む女性の後ろ姿。夕暮れ時でしょうか、足許に濃い影を落としたその姿は、周囲の景色と共に暖かな色彩に包まれています。描かれた女性は画家の妻、春子であり、スケッチ風の簡略な描写によって画家の身近な情景が描き出されています。

岡山県に生まれた鹿子木孟郎(1874~1941年)は、上京して洋画を学んだ後、教員試験に合格して明治29年、22歳の時に三重県津の美術教師として赴任しました。翌年には妻を迎え、新しい土地で新しい生活を始めた画家は、鉄道がもたらした近代的な景観に何を思ったのでしょうか。停車場近くの陸橋に立つ春子の視線の先には、畑の中を走る線路が遠くへ延びています。汽車が行き交う駅は、故郷など縁の地へと思いを馳せる場所でもあったでしょう。何気ないスケッチのようでありながら、時代の空気を過不足なく伝え、観る者に様々な想いを起こさせる作品です。(学芸員 吉田衣里)

## 明治の洋画 — 解説から鑑賞へ —

2008年8月2日[土]~9月23日[火・祝]

茨城県近代美術館

### Contents

- 1 明治の洋画—解説から鑑賞へ—
- 2 ご挨拶 開館20周年にあたって
- 3 探訪/戸田和子先生を訪ねて
- 4 美に遊ぶ
- 5 春の美術鑑賞旅行
- 6 所蔵作品から
- 7 企画展紹介
- 8 心に残る私の一点  
事務局異動  
あとがき



エリザベート＝ルイズ・  
ヴィジェ＝ルブラン  
「フランス王妃マリー＝  
アントワネットの肖像」

18世紀／東京富士美術館蔵

フランス革命の後、断頭台の露と消えたフランス王妃マリー＝アントワネット（1755～1793）については、『ベルサイユのばら』等を通じて、日本でもよく知られています。オーストリア皇女として生まれた彼女は、1770年フランス王太子のもとへ嫁ぎ、74年夫の即位により王妃となりました。美貌で知られ愛される性格の持ち主であった反面、思慮に欠け浪費家であったことから「赤字夫人」等と揶揄されて国民の反感を買い、革命を誘発する一因ともなりました。ここでも赤いドレスや羽根飾りの付いた帽子、真珠の首飾りなどを身につけ、宮廷での華やかな暮らしぶりがかがえます。

作者のヴィジェ＝ルブラン（1755-1842）は、18世紀で最も有名なフランスの女流画家の一人で、マリー＝アントワネット付きの画家を務め、彼女の肖像画を数多く描きました。革命後はフランスを離れ、オーストリア、ドイツ、ロシア、イギリスなどヨーロッパ各地をまわり肖像画家として活躍した後、1805年にフランスに戻りました。

（主任学芸員 山口和子）

## 大ナポレオン展

2008年11月22日〔土〕～2009年1月25日〔日〕  
茨城県近代美術館

### Contents

- 1 大ナポレオン展
- 2・3 特集／父 鶴岡義雄を語る
- 4 探訪／山中宣明先生を訪ねて
- 5 美に遊ぶ
- 6 所蔵作品から
- 7 企画展紹介
- 8 心に残る私の一点  
事務局から  
あとがき